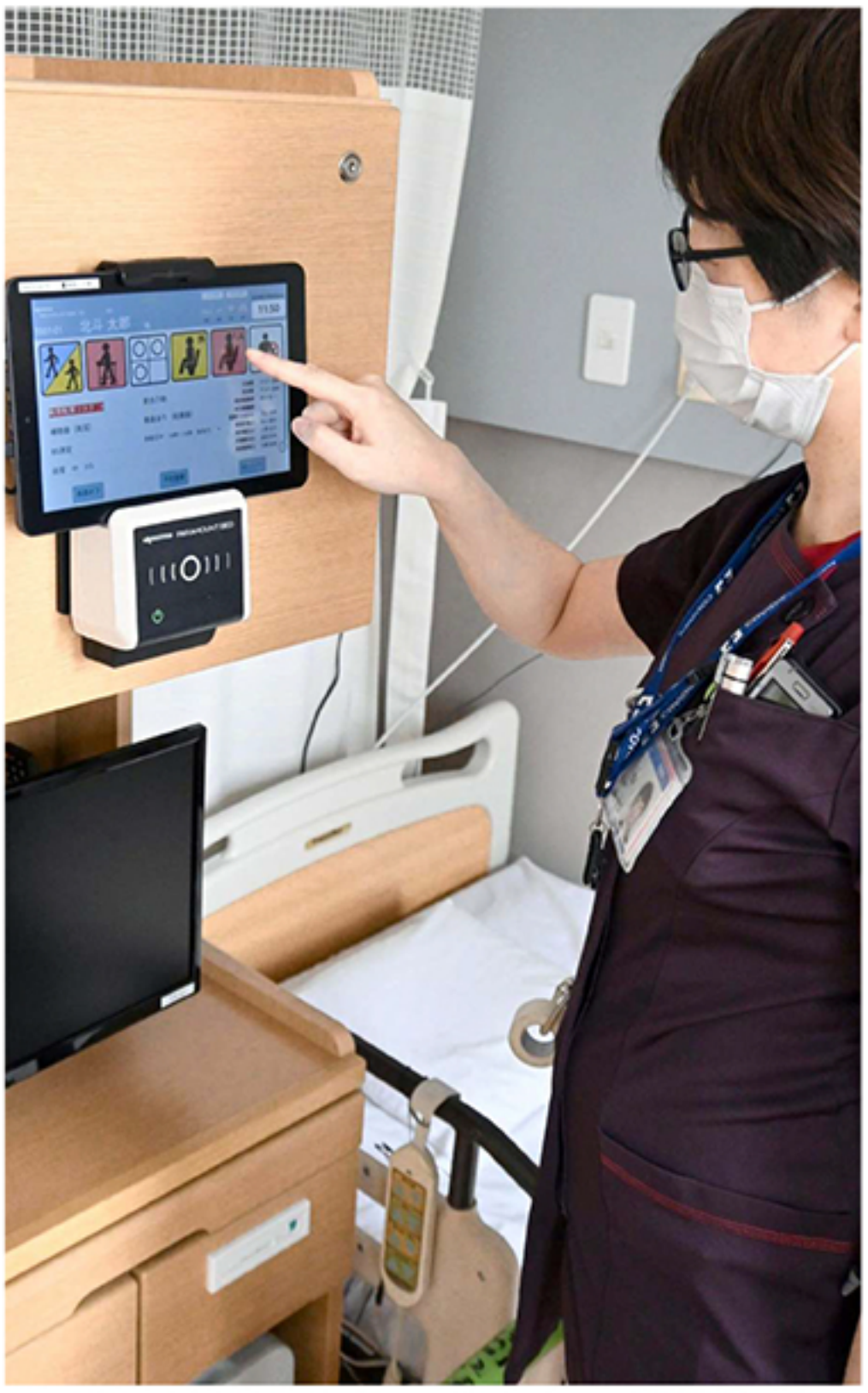
北斗・十勝リハビリセンター

入院患者の情報 ベッド横で一目

全199床システム導入

バイタルや動作 スタッフが共有 業務負担の軽減も

社会医療法人北斗（帯広、橋本郁郎理事長）の十勝リハビリテーションセンター（白坂智英院長）は、入院患者情報を集約し、ベッドサイドの端末に表示される「ベッドサイドケア情報統合システム」を全199床に導入した。同センターによると、道内で2例目、道東では初導入。11月の導入以降、スタッフ間での情報共有も容易になり、「患者のスケジュール把握、より一層のケアへの注力、スタッフの業務負担改善など多方面で効果がある」（同センター）とする。（松岡秀宣）



十勝リハビリテーションセンターが導入した「ベッドサイドケア情報統合システム」。患者の動作がピクトグラムで表示される

導入したのは、パラマウントベッド（東京）の「スマートベッドシステム」。ベッド上に寝る入院患者の離在床状態や睡眠・覚せい、体温や血圧などのバイタルサインを、IoT（モノのインターネット）による各測定器が感知。集めた情報は、日用品収納などに使う「床頭台」に設置のモニター端末に表示される。

さらに、モニターには、「リハビリ中」「入浴中」「ポータブルトイレ」「つえ歩行」「オムツ全解除」など、患者の日常生活動作（ADL）が、一目で分かるようにピクトグラム（絵文字）で表示。患者ごとの情報や状態、制限される事項などを分かりやすく図記号化した上で集約される。

また、床頭台のモニター端末に集まった情報は、ナースステーションに設置した端末でも表示される。これにより、看護師らが頻繁に巡回して確認していた状態変化も、ステーションで確認できるほか、患者のADLを多職種間で共有できるようになった。

システムの導入によって、「看護師の業務負担が軽減される」（浦島つよみ看護部長）という。バイタルデータはデータ化されて入力されるため、パソコンへの手入力作業の手間が省かれ、看護記録作成時間の削減にもつながる。

加えて、リハビリや入浴などで、ベッドを不在にすることも多い脳卒中の急性期を脱した回復期患者の居場所確認のため、「探し回ることも少なくなる」（浦島部長）。看護師業務の効率化も進められる格好だ。

同センターでは、患者情報の一元管理によって、看護師の負担を軽減しつつ、患者の安全と、看護業務漏れの防止などを徹底管理した上で、「効果的でスムーズなリハビリテーションと、安全安楽なケアを提供したい」とする。